異常プリオン蛋白試験管内増幅法（Real-time QUIC法）とバイオマーカーを用いたヒトプリオン病の髄液診断法の確立

研究分担者：長崎大学大学院医歯薬学総合研究科感染分子解析学分野 西田教行

1. 孤発性CJDのdefinite casesの内訳

日本	32	cases
オーストラリア	16	cases
韓国	4	cases
ドイツ	8	cases
スペイン	36	cases
総計	96	cases

2.RT-QUIC法を施行した非プリオン病患者の内訳

- アルツハイマー型認知症 200 cases
- 前頭側頭型認知症 4 cases
- 脳血管性認知症変性症 4 cases
- 橋本脳症 6 cases
- リンパ腫 2 cases
- MELA 4 cases
- 辺縁系脳炎 6 cases
- 精神疾患 7 cases
- 症候性けいれん 10 cases
- 神経梅毒 3 cases
- other diseases
  - 大脳皮質基底核変性症
  - 進行性多巣性白質脳症

3. 異常プリオン蛋白試験管内増幅法（Real-time QUIC法）とバイオマーカーを用いたヒトプリオン病の髄液の陽性率（全definite cases 96 症例）

14-3-3γ	t-tau	RT-QUIC	総数
＋	＋	＋	71
＋	－	＋	4
－	＋	＋	0
＋	＋	－	10
－	＋	－	2
＋	－	－	2
－	－	＋	3
－	－	－	4

4. 異常プリオン蛋白試験管内増幅法（Real-time QUIC法）とバイオマーカーを用いたヒトプリオン病の髄液の感度・特異度（96 definite sCJD症例+ 非プリオン病240 症例）

	14-3-3γ	t-tau	RT-QUIC
感度	91.7%	88.5%	82.3%
特異度	81.2%	86.8%	98.7 %

解　説

1. 確実例96症例と非プリオン病240症例におけるRT-QUIC法とバイオマーカーの感度・特異度について検討を行った。
2. 確実例96症例の検討ではRT-QUIC法の感度は82.3%、バイオマーカーである総タウ蛋白は88.5%、14-3-3蛋白は91.7%であった。
3. 非プリオン病240症例中RT-QUIC法にて偽陽性4症例を経験した。いずれもけいれんを呈している症例であった。非プリオン病でけいれんを呈する症例ではRT-QUIC法偽陽性に注意する必要性がある。